

現地社会のための地域研究を目指して

岡田 泰平 地域研究コンソーシアム運営委員長

2019年度に東南アジア学会選出の運営委員として、地域研究コンソーシアムに関わることになった。運営委員としての役割を果たせば良いと思っていたので、この団体により深く関わってきた人がリードしてくれることを期待していた。ところが、事務局が東京外国語大学のアジア・アフリカ言語文化研究所に移ることになり、紆余曲折の結果、なぜか私が運営委員長を務めることになった。

私は、くじ引き民主主義者である。偶然の結果、こういう役職を担うことになる。周りの人々の志向を生かし、組織や活動の発展に努力し、任期を無事に終え、次の人に良い形でバトンを渡すことが重要だ。こういう活動は時間も労力も取られるので、なるべく効率よく運営したい。こんなふうを考えている。事務局長の飯塚正人先生が大変に有能な方なので、ここまであまり大きな失敗もなくできてきたのでは、と感じている。

さて、地域研究についてである。たしかにフィリピンを主たる研究関心としてきたが、アメリカ植民地期の研究なので、現地のフィールドワークよりも、資料の渉猟により長い時間を費やしてきた。また、タガログ語の資料も一部は使ってきたが英語の資料が中心だった。そういう意味では、私はあまり胸を張って自分が地域研究者であるとは言えない。最近では、セブを中心に、日本占領期の歴史について、現地の研究者との共同研究を進めているが、こちらの研究はまだまだ途上である。

これらの研究を行うにあたり、現地語の習得を通じた現地社会の理解や、地域から説明枠組みを構築することの重要性を常々感じてきた。自分の研究でもこの信念を貫き、成果物にも表そうとしてきた。また、この度の役職のおかげで、優れた地域研究の業績に多数触れる機会を得ており、この信念はますます強まっている。

他方、フィリピンや他の東南アジア社会を研究していると、21世紀の20年代に入る現時点で、地域研究にとっての様々な困難を感じる。第一には、現地語資料を含む史資料の保存・公開制度の脆弱化である。デジタル化が進んだこともあり、そもそも十分とは言えなかった図書館・公文書館制度が弱まり、ますます資料の散逸が激しくなっている。デジタル化は、長期で見ると、資料の破壊と散逸以外をもたらさないのではないかと危惧する。第二に、計量的な分析と普遍的な理論の適用が強まっている。現地をつぶさに観察し、現地社会のあれこれに関わる。そして、自らの研究方法と当該地域を説明する枠組みを練り上げていく。こういう手間も時間もかかるやりかたの重要性を、より強く発信する必要があるだろう。

第三に、現地社会からの学術の発信力が弱くなっている。論文の点数化やそもそも弱かった学術出版文化の行き詰まりがその背景にある。グローバル化と共に、ナショナリズムが相対化されたことにより、現地社会の人々が自らの歴史や文化に関心を失いつつあると言えるのかも知れない。帝国の学知によって現地社会が未発達として認識されていたのと同様に、グローバル化に伴う数値化・序列化と「実用的」な学術が、現地社会の個性を見えにくくしている。

このように概観すると、この時代に求められる地域研究には、対象地域を日本語や英語で描き出すこと以上が望まれる。資料を収集し整理し公開すること、現地文化の興味深さを当該社会に向けて発信すること、環境破壊に抗して当該社会内外で調査や教育をし資料や文化財の保全活動をすること、矛盾に満ちた歴史について共に振り返ることなど、現地の人々が自らの足跡や文化について考えることができる様々な回路の整備が求められている。地域研究という学知は、その一助になるべきなのであろう。

現在、運営委員会を中心として、社会連携を強化し、地域研究の方法を捉えなおす作業が行われている。21世紀のグローバル化の中で、日本の地域研究がどのように現地社会の生活や文化に貢献しうるのか。地域研究コンソーシアムにおいて、この点が追究されることを望みたい。